

要旨

筋書とは、芝居の上演時に出版され、あらすじや配役、観劇時の注意事項など上演に関わる様々な情報を一冊に集約したものである。本稿では、立命館大学アート・リサーチセンター所蔵の筋書、とりわけ大阪道頓堀の中座のものを中心に一劇場における筋書の変遷を追うことによって、明治期から昭和初期にかけての筋書の構成・特徴について述べる。また、今回の調査により、一興行において二種類の筋書が出版されていたことが確認できたため、その点についても報告する。

abstract

Sujigaki is a book which contains synopsis, casts, manners for watching plays, etc. in one volume, and as a historical document, it can provide essential information. This paper will discuss about the characteristics and contents of *Sujigaki* (stage scripts) from Meiji to the early Showa era, referring to the *Sujigaki* collection of Art Research Center in Ritsumeikan, especially those of *Naka-za* theatre in Dotonbori district in Osaka. The proved to be published two types of *Sujigaki* in one stand.

はじめに

筋書とは、芝居上演時に出版されていたもので、現在は、プログラムやパンフレットと表現されるものの先駆的なものである。江戸時代は、絵本番付や絵尽しといった絵によって芝居の内容を表現したものが主流で、筋書が本格的に出版されるようになったのは、明治期に入ってからである。筋書は、芝居のあらすじを文章で記した出版物で、明治十二(一八七九)年に出版された「歌舞伎新報」に、芝居のあらすじが掲載され、このあらすじを独立した出版物として発売したのが始まりである。当初は、絵で芝居の内容を記した絵本番付とは別ものであったが、大正期に、あらすじと絵本番付の要素が合わさった形式となり、観劇時の情報を補助する役割を担っていた。本稿では、立命館大学アート・リサーチセンター(以下、立命館ARC)所蔵の大正九(一九二〇)年以降に出版された道頓堀中座の筋書を使用する。今回取り扱う筋書は、大正期になって定着した出版物であるため、大正期以降も数多くの演劇興行を行っていた劇場を対象にする必要がある。中座は、慶安五(一六五二)年に開場してから平成十一(一九九九)年まで、実に三百年以上の歴史があり、

青山いずみ (立命館大学大学院文学研究科 研修生)

E-mail ito204er@ed.ritsumeai.ac.jp

道頓堀五座の中でも、最も長く演劇興行が行われていた。筋書の持つ規則性を検証する上で、演劇興行期間が長く、数多くの筋書が現存しているという点から中座の筋書を使用する。

大阪における筋書の変遷は、明治十一(二八七八)年に「芝居の脚色(しばいのしぐみ)」と題し出版され¹⁾、中座興行に關しては、明治十一(一八七八)年四月「劇場の脚色」となる。この「芝居の脚色」は興行毎に、必ず出版されたわけではなく、発行日から興行後、不定期に出版されていたことがわかる。この様な筋書から興行毎に出版される形式に姿を変えたのが、松竹合名社が仕打として関わり始めた、明治三十九(一九〇六)年以降となる。本稿では、中座で筋書が興行毎に出版され始めたと考えられる大正九(一九二〇)年から昭和初期の筋書について述べる。

先行研究²⁾³⁾では、主に興行内容について触れられることが多く、筋書自体の具体的な構成に關しては、あまり触れられてこなかった。本稿では、筋書の構成と特徴を示す。

一 筋書の基本構成

(一) 大正九年から大正十二年

中座の筋書は、大正九(一九二〇)年から大正十二(一九二三)年の三年間と、それ以後の期間で筋書の構成が大きく変化している。

まず、立命館ARC所蔵の大正九(一九二〇)年五月六日初日の筋書(arcBP02-0006-002)を例としてみると、筋書の大きさは、二二センチ×一五センチの菊判で、各頁は両面印刷され、見返しを含めて三十三頁で、金属製の針で綴じられている。見返しには、座主松竹合名社による

口上、芝居茶屋一覽、観劇料が掲載され、二頁目には「共通観覧切手発売」と銘打って、松竹傘下の劇場にて共通して利用できる観劇切手の広告、三頁目には中座案内図が掲載されている。四頁目には配役表が掲載され、五頁目から二十頁目までは、挿絵とあらすじが掲載されている。各演目につき見開き二頁が割かれており、右頁は三段組みで、一段目に配役、二段目以降にあらすじ、左頁は一段目と二段目部分に挿絵が入り、三段目に、あらすじの続きが掲載される形となっている。二十一頁目には音曲や大道具方、脚本係等、興行に關わる人間が一覧化されている。二十二頁目からは「俳優楽屋話」と称した役者による記事が三十一頁まで続き、三十二頁には「汽車時間表」と奥付が掲載されている。奥付には、「編輯兼級行人 東政次郎」「印刷者 佐藤保太郎」「印刷所 文祥堂印刷所」と掲載されており、いずれも所在地が東京となっている⁴⁾。二十三頁と裏表紙裏には「ミツワ家庭薬」「ミツワ椿油」といった企業広告が掲載されている。多少掲載順や頁数の増減はあるものの、大正九(一九二〇)年からの三年間は、この構成が崩れることはない。

(二) 大正十三年以降

次に、大正十三(一九二四)年以降の筋書として、立命館ARC所蔵の大正十三(一九二四)年一月二日初日の筋書(arcBP02-0006-014)をあげる。大きさは、二二・五センチ×一五センチの菊判で、袋綴じに印刷され、見返しを含めて十五頁で、金属製の針で綴じられている。以前と比べると、頁数が明らかに減少している。見返しには、口上、二頁目から六頁目までは、あらすじのみ掲載されている。以前は、各演目につき挿絵を含めて、必ず二頁分確保されていたが、この頃から演目毎にあらすじの分量が異なる。七頁目から十五頁目には、演目の一場面

を描いた挿絵と配役が記されており、絵本役割のような仕様である。

裏表紙裏には、音曲や脚本係等の一覧の他に、観劇料が掲載され、奥付の掲載はない。昭和に突入すると、劇場案内図や前売り券に関する広告等が加わるが、大正十三(一九二四)年以降は、この構成が基本となる。奥付に関しては、昭和七(一九三二)年一月二日初日の筋書(arcBP02-0006-195)に「編輯發行人 島江鏡也」「印刷所 ミカド印刷合資會社」「發行所 松竹宣傳部」とあり、いずれも所在地は大阪である。

この頃から、最終頁もしくは、裏表紙裏の余白に奥付が掲載されるようになる。以前の筋書にあった「俳優楽屋話」が掲載されていない分、页数こそ減少しているが、印刷されている紙は袋綴じのため以前の筋書よりも丈夫である。また、歌舞伎の場合は袋綴じが採用され、新派や喜劇といった歌舞伎以外の興行の場合は両面印刷が採用されており、紙質も、歌舞伎と、それ以外の興行では若干の違いがある。

この二つの期間の筋書構成の違いは、出版地によるもので、大正十二(一九二三)年九月一日に発生した関東大震災が、少なからず影響していると考えられる。大正十二(一九二三)年の筋書で立命館ARC所蔵のものは、三月五日(arcBP02-0006-012)、三月三十一日(arcBP02-0006-0013)の二点で九月以降のものは確認できなかった。

二 筋書の特徴 ― 興行における二種類の筋書 ―

(一) 表紙と値段表

立命館ARCには、同一興行の筋書が複数冊所蔵されている。それらの筋書の中には、同一興行時の筋書にも関わらず、表紙の色が一部変更

されたものが存在する。

図1・図2(arcBP02-0006-32)と図c・図4(arcBP02-0006-031)は、どちらも大正十四(一九二五)年五月一日初日の筋書である。同一興行であるが、表紙の「大阪記念興行」の文字の色が図1は青色、図3は赤色で印刷されている。表紙以外にも、裏表紙裏に掲載される「値段表」に違いがある。図2には「初日の値段表」と「二日目よりの値段表」の二通りの値段表が掲載されているが、図4は図2の「二日目よりの値段表」と同じ金額の値段表のみ掲載されている。この興行以外にも、二種類の筋書が多く存在し、いずれも表紙の一部分の色と値段表が異なる。

図5・図9(arcBP02-0006-047)と図7・図8(arcBP02-0006-046)は、大正十五(一九二六)年五月四日初日の筋書で、表紙の背景の色が異なる。このように、表紙の違いに規則性は無いため、興行毎に文字の色が異なることもあれば、背景の色が異なるなど様々であるが、同一興行の筋書で、表紙の違いに伴い、値段表もほぼ確実に初日料金の有無が異なる。また、新派や喜劇の興行時にも、表紙の色が異なる筋書が出版されているが、歌舞伎興行とは異なり、料金表に違いはない。よって、初日の料金が安く設定されているのは、歌舞伎興行時のみということになる。これらの二種類の筋書は、いずれも大正十三(一九二四)年以降の筋書でのみ確認できることから、出版地が大阪になってから、二種類の筋書が誕生したといえる。

(二) 「中座番附印章」印と切手

前述した表紙と値段表の違いから、同一興行において、二種類の筋書が存在したことが明らかとなったが、この二種類の筋書のうち、二日目以降の値段表のみ掲載されている筋書には、高確率で表紙または、裏表

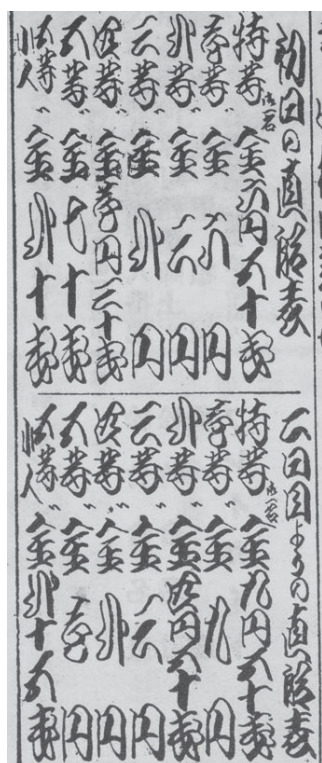


図2 中座 大正14年5月興行
値段表 (arcBP02-0006-032)



図1 中座 大正14年5月興行 表紙
(arcBP02-0006-032)

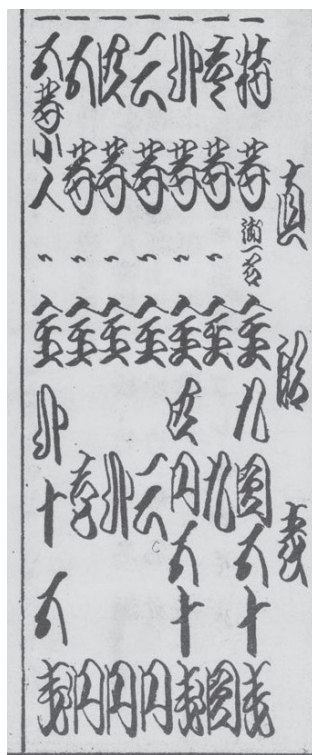


図4 中座 大正14年5月興行
値段表 (arcBP02-0006-031)



図3 中座 大正14年5月興行 表紙
(arcBP02-0006-031)

同人	同人
大券	大券
皮券	皮券
云券	云券
非券	非券
季券	季券
特券	特券

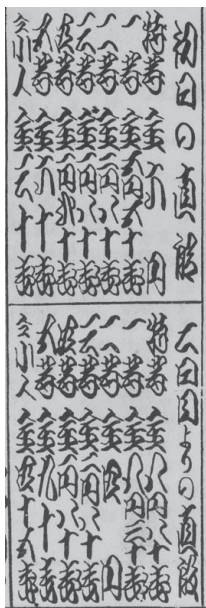
図6 中座 大正15年5月興行
値段表 (arcBP02-0006-047)

図5 中座 大正15年5月興行 表紙
(arcBP02-0006-047)

同人	同人
大券	大券
皮券	皮券
云券	云券
非券	非券
季券	季券
特券	特券

図8 中座 大正15年5月興行
値段表 (arcBP02-0006-046)

図7 中座 大正15年5月興行 表紙
(arcBP02-0006-046)

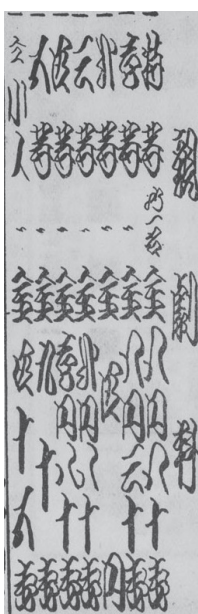


上段右 図9 中座 昭和4年3月興行 表紙

上段中央 図10 値段表

上段左 図11 裏表紙

下段 図12 裏表紙の切手、消印部分
全て(arcBP02-0006-097)

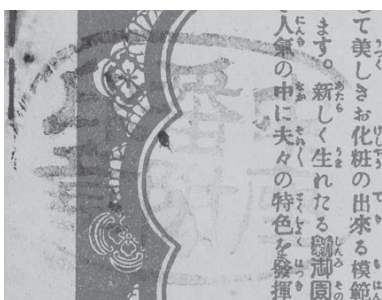


上段右 図13 中座 昭和4年3月興行 表紙

上段中央 図14 値段表

上段左 図15 裏表紙

下段 図16 裏表紙の「中座番附印章」印部分
全て(arcBP02-0006-098)



紙に「中座番附印章」の押印が確認できる。図9～図12 (arcBP02-0006-097)と図13～図16 (arcBP02-0006-098)は、共に昭和四(一九二九)年三月二日初日の筋書である。図9と図13を比べると、表紙の背景色と「當る弥生興行 東西合同大歌舞伎」の文字の色が異なり、図10は「初日の値段」と「二日目よりの値段」の両方が掲載されている。図14には図10の「二日目よりの値段」と同じ料金の「観劇料」が掲載されている。図12と図16は、それぞれの裏表紙に、押印または、貼付物がある部分を拡大したものである。図12は破れてしまっているが、黄緑色の印刷で「□□郵便」と読み取れ、郵便切手であることがわかる。この郵便切手は形状と色から大正十五(一九二六)年七月五日発行の二銭切手と合致する。よって、図12で確認できる「船場/□□」は消印と見るべきであり、図9～図12の筋書は、郵送されたと思えるを得ない。図10の「初日の値段」が掲載されている点から、興行初日以前に郵送されたと見て間違いないだろう。図13～図16は値段表の「初日の値段」や郵便切手、消印が確認できないことから、二日目以降の興行のために出版された筋書と位置づけられる。この条件に当てはまる筋書は、高確率で「中座番附印章」が押印されていることから、初日興行日を境として、二種類の筋書を出版していたといえる。

おわりに

中座の筋書について、以下二点が明らかとなった。

- ・ 同一劇場であっても出版地によって筋書の構成が異なる
- ・ 同一興行で二種類の筋書が出版されていた

まず、中座の筋書が継続的に出版され始めた最初の三年間は、東京の印刷所による出版であることがわかった。大阪の劇場にも関わらず、東京の印刷所が出版を請け負っていたことから、東京と大阪において同じ興行をする際に、版の一部が使い回されていた可能性がある。大正九(一九二〇)年には既に松竹が東京進出を果たしていることからも、東京を中心として効率良く筋書の出版を行っていた可能性がある。この点を明らかにするために、今後は、一劇場に留まらず、地域や劇場の垣根を越えた調査が必要となる。そして、昭和七(一九三二)年まで、出版地や印刷所の掲載はないものの、筋書の構成から、大正十三(一九二四)年以降の中座の筋書は、大阪で出版されたものと考えられる。東京で出版されていた筋書に比べ、頁数は減少し、文字と挿絵は大きくなり、必要最低限の情報を簡潔にまとめ上げた筋書となっている。また、歌舞伎と歌舞伎以外の興行では、意図的に印刷する紙や、綴じ方を変更している点は非常に興味深い。

次に、同一興行の筋書を調査することで、二種類の筋書が出版されていたことが明らかとなった。歌舞伎興行においては、観劇料が初日は安価に設定された筋書と、通常料金ものがあり、それぞれ表紙の一部分の配色が異なる仕様となっている。また、新派等の歌舞伎以外の筋書は、観劇料は同じだが、表紙の仕様が異なるものが存在するため、表紙の仕様の違いは、観劇料の金額ではなく、いつ観客の手に渡るかという点で、違いが表れていたと考えるのが妥当である。そして、歌舞伎興行に関しては、郵便切手が貼られた筋書が数多く確認でき、これらは、初日観劇料の掲載があるため、興行初日前には、観客の手元に渡っていたに違いない。それまで、芝居の情報を伝えるために用いられていた役割番付に

代わり、演目、配役、あらすじ等、芝居に関するあらゆる情報が一冊に集約された筋書が普及したと考えられる。宣伝を兼ねて配られていた役割番付同様、筋書も事前に観客の手元に手渡しや郵送で届けられたと思われる。また、筋書が読み物として充実したことから、劇場側の新たな収入源となり、劇場運営に影響を与えた可能性がある。

本稿では、従来の研究では触れられることの少なかった筋書の構成と、同一興行の比較を中座の筋書に限定して試みた。期間としては、大正九（一九二〇）年から昭和初期と、中座が劇場として機能していた期間からみると、非常に短い期間であったが、筋書の構成と特徴の一端を示すことができた。

〔付記〕

筋書の調査にあたり赤間亮先生をはじめ、立命館大学アート・リサーチセンター関係者の皆様からの多大なご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

〔注釈〕

- (1) 赤間亮「歌舞伎の「筋書本」に関する覚書―次世代の歌舞伎のために―」（『文化の変容と再生』法律文化社、一九九六）
- (2) (1)に同じ。
- (3) 近藤瑞男「二種の歌舞伎プログラム―日生劇場と帝国劇場―」（『総合文化研究所紀要』第16号、二〇一〇）
- (4) 各所在、「編輯兼發行人 東政次郎 東京市日本橋區橋町四丁目十五番地」印刷者 佐藤保太郎 東京市京橋區新築町二丁目廿一番地「印刷所 文祥堂印刷所 東京市京橋區新築町二丁目廿一番地」
- (5) 各所在、「編輯發行人 島江鏡也 大阪市南區久左衛門町八 松竹興行株式會社大阪支店內」印刷所 ミカド印刷合資會社 大阪市東區和泉町二丁目一二二「發行所 松竹宣傳部 大阪市南區久左衛門町八 松竹興行株式會社大阪支店

内」

- (6) 昭和四（一九二九）年六月興行（arcBP02-0006-106）、昭和六（一九三一）年三月興行（arcBP02-0006-158、arcBP02-0006-159）他
- (7) 昭和四（一九二九）年二月興行（arcBP02-0006-113、arcBP02-0006-114）
- (8) 『原色日本郵便切手図鑑』（通信博物館、一九六五）
- (9) 明治四十三（一九一〇）年に新富座買収に伴い東京進出。